

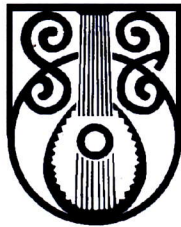
オーケストラ シンフォニカ 東京

第 53 回

定期演奏会

平成 24 年 4 月 14 日 (土) 午後 2:00 開演

第一生命ホール



OSTの歴史

- 1915(大正 4)年 9月：武井守成*₁楽団創設
 1916(大正 5)年 4月：楽団名をシンフォニア・マンドリニ・オルケストラと称する
 1923(大正 12)年 11月：楽団名をオルケストラ・シンフォニカ・タケキに改称
 1949(昭和 24)年 11月：戦後初めての定期演奏会開催(第 49 回)
 1949(昭和 24)年 12月：武井守成 逝去
 1953(昭和 28)年 5月：オルケストラ・シンフォニカ・タケキ 第 55 回演奏会開催
 1954(昭和 29)年 杉並マンドリンアンサンブル創立
 1955(昭和 30)年 10月：杉並マンドリンアンサンブル 第 1 回演奏会(通算 56 回)
 1956(昭和 31)年 7月：オルケストラ・シンフォニカ・タケイに改称 第 57 回演奏会開催
 1958(昭和 33)年 12月：オルケストラ・シンフォニカ・タケイ 解散
 1959(昭和 34)年 12月：杉田村雄*₂オルケストラ・シンフォニカ・タケイを復興
 本楽団第 1 回定期演奏会開催
 1986(昭和 61)年 7月：杉田村雄 逝去
 1987(昭和 62)年 5月：楽団名をオルケストラ・シンフォニカ・東京に改称
 2012(平成 24)年 4月：第 53 回定期演奏会開催

* 1) 武井守成 (たけい もりしげ：1890年10月11日～1949年12月14日)

枢密顧問官武井守正の二男として鳥取に生まれる。宮内省楽部長・武部官長、男爵。
 マンドリン合奏団『オルケストラ・シンフォニカ・タケキ』(OST)を主宰し、マンドリン
 合奏曲・ギター独奏曲の作曲家として活動。また雑誌『マンドリンギター研究』を発刊し、
 1923年にマンドリン合奏コンクール、1924年に作曲コンクール、1927年にはマンドリン
 オーケストラ作曲コンクールを開催してマンドリン・ギター音楽の発展に尽力した。

* 2) 杉田村雄 (すぎた むらお：1903年2月14日～1986年7月17日)

八王子・南多摩郡多摩村の村医杉田武雄の長男として生まれる。
 暁星中学時代、クラスメートの斉藤秀雄とともに比留間賢八に師事、2人で暁星マンドリン
 倶楽部から静美社音楽部へと音楽活動を進める。
 1939年OSTに入団。戦時中、武井守成氏の多摩村東寺方への疎開に尽力し、音楽関係
 楽譜・資料も戦火を免れる。
 武井氏逝去後、OSTの再興にあたり理事長および指揮者を務める。武井氏の楽譜出版
 に尽力。日伊音楽協会理事長、日本マンドリン連盟副会長を歴任し斯界に貢献された。

御 礼

昨年の第 52 回定期演奏会におきまして、ご来場の皆様に東日本大震災の義援金をお願い
 致しましたところ、149,181円となりましたので、日本赤十字社を通じて義援金口座に
 振り込みを致しました。被害を受けられました地域の皆様の一日も早い復興とご健康をお祈
 り致します。

誠にありがとうございました。

オルケストラ シンフォニカ 東京 一同

プログラム

第 一 部

指揮： 嶋 直 樹

1. 管弦楽組曲第3番より「Air(エア)」 J.S.バッハ (嶋 直樹編)
2. 風鈴屋 武 井 守 成
3. 微風(そよかぜ) 武 井 守 成
4. 小セレナーデ「山吹く風」 A.モルラッキ
5. 風笛(かぜぶえ)～あすかのテーマ～ 大島 ミチル (山本 雅三編)
6. ソスピーリ(ため息)
アルト・フルート独奏 西村 いづみ E.W.エルガー (嶋 直樹編)
7. 交響曲第6番「田園」より第一楽章 L.v.ベートーヴェン (葛谷 悦子編)
(嶋 直樹改編)

《 休 憩 20分 》

第 二 部

指揮： 山 本 雅 三

1. 母なる地球 服部 克久 (山本 雅三編)
2. 組曲 蟋蟀(こおろぎ)の恋 N.アラッショ (中野 二郎編)
 - i) 出会い
 - ii) セレナーデ
 - iii) 愛の告白
 - iv) 結婚のガボット
3. 自由なき翼 加賀城 浩光
 - i) ももいろペリカン
 - ii) 笑う白フクロウ
 - iii) 空色ペンギン
4. バレエ組曲「くるみ割り人形」より「花のワルツ」 P.I.チャイコフスキー (宮田 俊一郎編)

曲 目 解 説

第 一 部

今回の第一部は「風の旅」をテーマにして選曲いたしました。

管弦楽組曲第3番より「エール」

ヨハン・セバスチャン・バッハ

J. S. バッハ (1685 年～1750 年) は管弦楽組曲を4曲作曲しており、いわゆる「G線上のアリア」と呼ばれるこの曲は第3番の第2曲。原題は Air (エア、エール) です。バッハはこの管弦楽組曲をフランス様式で作曲しておりますが、「エール」はフランス器楽舞曲の一つです。

アリア(伊)もエール(仏)もエア(英)も共にギリシャ語の「エアロ」が語源の言葉で、元々は空気・大気・雰囲気の意味でした。それがイタリアで「歌」を意味する言葉となり、フランスでは舞曲の一つとして発達しました。

「風」は空気の流れ、今日の演奏は天地開闢の初め、混沌な状態の中から「風」が誕生するイメージで演奏いたします。

風 鈴 屋

武井守成

当団体の創始者武井守成 (1890 年～1949 年) が1928年に作曲した「夏の組曲」の第2曲です。真夏、炎天下に風鈴の音は涼しげで心をホッとさせます。そのような風鈴をたくさん天秤棒に吊るし売り歩く風鈴屋は夏の風物詩でありました。しかしながらこれはかなりの重労働であったことでしょう。ある時には真夏特有の雷雲が発生し、遠くで稲妻が光りゴロゴロと鳴っている。それが段々近づいて来ようものなら、いつ雨が降り出すやら気が気ではなかったに違いありません。やがて雷が遠くへ去ってしまった時の「助かった」という気持ち。風鈴屋の心の動きが音で表されています。

微 風 (そよかぜ)

武井守成

「風鈴屋」と同じく武井守成が1947年に作曲しました。

木枯らしが吹く寒い冬が終わり、やがて春一番が野山や街を吹き抜けると空気の色も一変し、待ちに待った春がやってきます。時には寒い風が名残惜しそうに吹くことがあっても、時は春。春の微風(そよかぜ)が頬を優しく撫でていきます。

小セレナーデ「山吹く風」

アルマンノ・モルラッキ

アルマンノ・モルラッキ (1873 年～1941 年) はイタリア・ミラノで活躍した音楽家でマンドリン曲の作曲の他、様々な編曲をしたことで知られています。

山の木々の間をすり抜け、枝を揺さぶり葉擦れの音をたてて風が回っていきます。光合成の作用で炭酸ガスは吸収され新鮮な酸素が山いっぱいに広がり、動物たちや訪れた人々の体をリフレッシュしてくれます。風の流れ、震え、広がりが眼前に見えてくるようなさわやかな曲です。

風 笛（かぜぶえ）

大 島 ミ チ ル

NHK朝の連続ドラマ「あすか」(1999年)のテーマ曲でした。奈良県明日香村と京都市が舞台で、和菓子職人を目指す若い女性の物語でした。作曲した大島ミチル(1961年～)は長崎市出身で、現在尚美学園大学の客員教授。主に映画音楽を作曲することで知られています。原曲ではオーボエが主体で演奏されました。

笛を鳴らすのは人の息、空気の流れ、風。とするとすべての笛が風笛ということでしょうか。清々しい緑の風を感じさせる佳曲です。

ソスピーリ（ため息）

エドワード・ウィリアム・エルガー

イギリスを代表する作曲家E. W. エルガー (1857年～1934年) は第2の国歌とも言われる行進曲「威風堂々」第1番や「愛の挨拶」など幅広いジャンルの曲で知られています。

原曲は弦楽合奏にハープとオルガンが入る、悲痛とも思える深く沈んだ雰囲気曲です。今回はハープをギター、オルガンをピアノ、そしてメロディーをアルト・フルートのソロでお聴かせいたします。おそらく原曲以上に不思議な響きとなるでしょう。アルト・フルートは通常のフルートより4度低い音が出ます。低音の音域はマンドリンと同じですが独特の落ち着いた音色が特徴です。ソスピーリは、レコード会社からの依頼で代表作「愛の挨拶」と共に録音されるために書かれ、タイトルも「愛のため息」となるはずだったのですが、作曲中のエルガーに何が起こったのか、曲想が大きく変わり深い悲しみを表現するような曲になってしまいました。そのため別の曲をセットにして録音したというエピソードが伝えられています。

交響曲第6番「田園」より第1楽章

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン

L. v. ベートーヴェン (1770年～1827年) はあまりにも偉大な作曲家であり様々なエピソードで知られています。「田園」は1808年に作曲されました。この曲では小鳥のさえずりや小川のせせらぎ、また嵐・雷鳴などを思わせる表現があちこちにされていますが、ベートーヴェン自身は、自然描写を音で表したのではないと言っていたようです。

各楽章のタイトルをあげてみますと、

交響曲第6番 田園交響曲、あるいは田舎の生活の思い出(音画よりも感情の表現)

第1楽章 田舎に着いたときに人の心に目覚める心地よく晴々とした気分

第2楽章 小川のほとりの情景

第3楽章 田舎の人々の楽しい集い

第4楽章 雷、嵐

第5楽章 羊飼いの歌。嵐のあとの、慈しみに満ちた、神への感謝と結びついた気持ち

ベートーヴェンよりもっと古い時代では「田園」すなわち「パストラーレ」は伝統的なクリスマス音楽を思わせるものでした。ベートーヴェンはこの曲全体を通して単なる田園の描写ではない、自然界そのものを創造した神への感謝の祈りを表現したかったのかも知れません。音画の描写ではないという点は武井守成が「風鈴屋」で単なる風鈴の音ではなく風鈴屋の人間としての感情描写を表現したところと似通っていて興味深いところです。

「風の旅」をテーマとしてきた本日の第一部ですが、旅の集大成としてこの曲を選びました。田園には様々な自然の風、人々のため息、喜びや悲しみ、真心や希望、感謝の気持ちなどが渦巻いています。皆さんが心に思い描く田園風景を重ね合わせてお聴きください。

(文責・嶋)

第二部

母なる地球

服部 克久

現在活躍中の作曲家・編曲家である服部克久氏（1936年～）が「音楽の自然食」をテーマに作曲した「音楽畑」シリーズの第10作収録曲です。「音楽畑」は1983年から2003年にかけて20作が発表され、日本レコード大賞企画賞も受賞したインストゥルメンタル（器楽曲）集です。作者のコメントをご紹介します。

地球は今、病んでいる。

何処がどう悪いと判らないまま、少しずつ身体の内をむしばまれている。

このまま放って置くと、地球は生命体の住めない死の惑星になってしまうのかも知れない。

勿論人間には知性というものが有るから、黙って手をこまねいている訳では決して無い。

フロンガスを廃止したり、動植物のサンクチュアリーを作ったり、植林をしたり、

地球環境を守るために、あらゆる手段をつくそうとしている。

間に合うかもしれない。もしかするともうおそいのかも知れない。

一つだけ確実に言える事は、毎年地球上から、いくつかの種が絶滅して行く事だ。

今年はもしかしたら、トキがいなくなるのかも知れないし、

来年はマナティで、次の年は桜草の番かも知れないのだ。

どんなに科学が進んでも、決して人間の手では作り出す事の出来ない、愛すべきさまざまな生物達。

このアルバムは、そうした、はかない、愛すべき地球と地球上のすべての生物に捧げる、

僕のささやかなオマージュで有る。

服部克久

組曲「蟋蟀（こおろぎ）の恋」

ニーノ・アラッショ

コオロギが恋人と出会い、セレナードを奏でて愛をはぐくみ、ロマンチックな告白からめでたく結婚へ。おなじみのコオロギという虫を題材に、その恋を4つの楽章で描いたユニークで可愛い組曲です。コロコロ？という鳴き声が聞こえてくるようです。マンドリンの研究・作曲編曲の第一人者であった中野二郎（1902年～2000年）先生が、イタリア留学中のマンドリニスト石村隆行氏から送られてきたマンドリンとピアノの楽譜の中に本曲を見つけ、「作者の意図の虜となり、無我夢中でマンドリン合奏譜に編曲」。1993年に日本マンドリン連盟から中野二郎編曲マンドリン合奏曲集⑦として出版されました。作者アラッショは1872年ジェノバ生まれ、ピアノ・作曲の教授を務め、歌劇を作曲、マンドリンでは他に組曲「田園にて」があるとの事ですが、詳しくは知られていません。

組曲「自由なき翼」

加賀城 浩光

加賀城浩光（1961年～）はマンドリンバンド等の活動を経て、現在、楽団「プロムナード」主宰として活動中です。2002年からはマンドチェロ奏者として本格的に活動を開始し、マンドリン音楽の新ジャンルを生み出すべく、新たな楽器の企画や新曲の作曲に意欲的に取り組んでいます。2000年には日本マンドリン連盟主催のマンドリン合奏曲作曲コンクールで「PromenadeⅢ」が次位入賞。また、現代ギター社より「マンドリンオーケストラの為のプロムナード1」を発売中です。

加賀城氏が書かれたこの組曲への思い、そして、それぞれの曲へのコメントを以下にご紹介します。

『私は子供の頃から動物園が大好きです。しかし大人になった今、なかなか行くチャンスがありません

でした。しかしある日仕事で行った山口県の徳山という所で偶然にも動物園を発見したんです。それほど大きな動物園ではないのですが、なぜか懐かしい雰囲気にとまれ、さっそく数日後にはあらためて訪れることとなりました。

さて、その日はとてもいい天気にも恵まれ、親子づれや子供達にまじり、わくわく気分が入園しました。はたして子供の頃のような感動はあるのだろうか？ 期待でいっぱいだったのですが、オリの中の動物達と目を合わせているうちに、子供の頃には感じなかったなにか空しさが自分を襲ってきます。自分とオリの中にいる動物を入れ替えて考えてしまうんです。

そして自分のいる人間の作った社会が不自然に感じてくるんです。その気持ちを作曲という形で表現したのがこの作品です。なぜか動物は翼をもった者達になってしまいましたが、きっと大空を飛びたい。自由になりたいという気持ちが一番強く感じてきたからでしょう。この日は動物達に色々と教えられる一日となりました。』

1998.1 加賀城 浩光

ももいろペリカン

オリの中にいる二匹の「ももいろペリカン」。外の世界を夢見ているのだろうか。仲良くくっついて瞳を閉じている。私達人間も見えないオリによって自由を奪われているような気がします。せめてこのももいろペリカン達だけでも仲良く大空を自由に飛ばせてあげたい。

笑う白フクロウ

どんなに辛い事があっても どんなに悲しい事があっても いつも笑顔の「白フクロウ」
そう どんな時でも笑顔をつくる事が大切ですね

空色ペンギン

青い海を自由に泳ぐ「ペンギン」。でも陸に上がるとヨチヨチ歩き。
当然パタパタしても空なんか飛べない。
人間にもできる事とできない事があります。
そしてそんな悩みと戦いながらみんな生きているんです。
そう 人の心も空色なんです。

2011.5.9 加賀城 浩光

バレエ組曲「くるみ割り人形」より「花のワルツ」 ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー

本日の演奏会の第二部では「生きることへの賛歌」をテーマに選曲をしました。

時には牙をむき過酷に、熾烈に、しかし温かく私達をはぐくむ「母なる地球」。その地球上に生きる生き物たちから、「こおろぎ」「ペリカン」「フクロウ」「ペンギン」に登場してもらいました。最後は華やかに花いっぱい花の輪舞で締めくくりたいと思います。

ロシアを代表する作曲家チャイコフスキー（1840年～1893年）の「白鳥の湖」「眠れる森の美女」に並ぶ三大バレエの一つ「くるみ割り人形」より有名な「花のワルツ」です。

女の子のクララはクリスマスイブにプレゼントされたくるみ割り人形がとても気に入ります。深夜になってその人形と共にはずかぬと闘ったり、人形が美しく変身した王子様と雪の国を通り、お菓子の国へ行って金平糖の精に会います。そこでは色々な踊りが披露され・・・と夢と冒険のファンタジーが繰り広げられていきます。花のワルツはフィナーレにふさわしい明るく躍動感にあふれた曲です。花をモチーフに、いのちの息吹、素晴らしさを生き生きと表現しているように感じられます。

（文責・山本）

出 演 者

指 揮 者： 山 本 雅 三 嶋 直 樹
 コンサートマスター： 本 間 輝 樹 金 勝 溪 子

第一マンドリン：	本 間 輝 樹 金 勝 溪 子	田 島 明 子 田 中 尊 子	小松崎美奈子 小 川 真 寿 美	諸 井 美 津 江 萩 原 洋 子 田 沼 均
第二マンドリン：	富 田 容 子 後 藤 俊 明	大 口 千 秋 中 村 順 子	木 村 栄 子 高 嶋 明 美	新 美 恵 子 山 本 雅 三 嶋 直 樹
マンドラテノール：	滝 田 ふ さ 子 田 中 倭 文 子	渡 辺 清 佐 々 木 興 治	深 野 靖 夫 伊 藤 安 子 阿 形 佳 美	高 嶋 典 子 新 谷 文 子 荏 本 妙 子
ギ タ ー：	平 田 陽 一 宮 本 紀 子	伊 藤 美 歩 門 田 雄 二	戸 次 脩 船 崎 薫 木 下 亜 紀 子	黒 崎 恵 美 子 石 田 利 光 澤 田 行 雄
リュートモデルノ：	吉 尾 浩	高 梨 一 弘		
マンドロンチェロ：	宮 崎 泰 行	田 村 美 恵 子	坪 井 秀 介	須 賀 勇 介 富 樫 孝 子
マンドローネ：	家 城 孝 治	宮 本 皓 永		
コントラバス：	佐 藤 正	石 黒 不 二 夫		
フ ル ー ト：	★西 村 い づ み			
クラリネット：	★福 嶋 美 香			
ピ ア ノ：	★浦 畠 晶 子			
打 楽 器：	★橋 本 直 樹 ★田 中 恵 利 加			

(★=賛助奏者)

幹 事： 平 田 陽 一 (代表) 本 間 輝 樹 山 本 雅 三 嶋 直 樹
 諸 井 美 津 江 船 崎 薫
 会 計 監 事： 後 藤 俊 明

《第54回定期演奏会のお知らせ》

◎日時：平成**25**年**4**月**14**日(日)午後 2:00 開演 ◎会場：第一生命ホール(晴海・トリトンスクエア)

オルケストラ シンフォニカ 東京 (O S T)

連絡先：〒215-0017 川崎市麻生区王禅寺西5-21-1 平 田 陽 一

T E L : 044-989-1987 E-MAIL: chokoku@jcom.home.ne.jp

ホームページ：http://ostokyo.info/